

よい文章を書くための15か条 (解説編)

平成15年6月21日発行「補習校だより」第10号より抜粋

主語と述語を照応させる。

主語 述語関係（主述関係）の基本文型は、次の四通りです。

- ア 何ガ - ドウスル・ドウシマス
- イ 何ガ - ドンナダ・ドンナデス
- ウ 何ガ - 何ダ・何デス
- エ 何ガ - ある・ない・いる・いない

このような結びつきになっていれば、主述は照応しているということになります。主述が照応していないと、何がどうしたのか、あるいは、どうしたのは何かが、読み手に伝わりません。

ただし、日本語では主語を必ずしも明示しませんので、主語にあたる言葉がつねに書かれていなければならないということではありません。

例で見てみましょう。

A 「ぼくは、土曜日に補習校に行くのは、パパが運転します。」

B 「九月からは、おかげさまで 大学に進学が決まり、新しい学校生活が始まります。」

C 「悲しいときは星を見つめて涙を流し、苦しみにぶつかったときは、星に励まされて新しい道を見いだすことができるたった一人の友だ。」

基本に戻ることが問題解決に役立つといっても、こういう場合の指導をア～エの基本文型から始めるのは生産的ではありません。それよりは、一つの文を短くするほうが効果的です。「文を短くする」ことを「初級」とし、十五か条中の に置いているのは、基本的な留意事項ということです。

実際にやってみましょう。

a 「(ぼくは、)土曜日に補習校に行くのが、すきです。車はいつもパパが運転します。」

b 「わたしは、おかげさまで 大学に進学が決まりました。九月からは、いよいよ新しい学校生活が始まります。」

c 「わたしは、悲しいときは星を見つめて涙を流す。苦しみにぶつかったときは、星に励まされて新しい道を見いだす。星は、わたしにとって、たった一人の友だ。」

なお、「照応」と似た言葉で「呼応」がありますが、こちらは「副詞の呼応」「呼応の副詞」というときに使います（「まさか ないだろう」「もしかしたら かもしれない」など）。